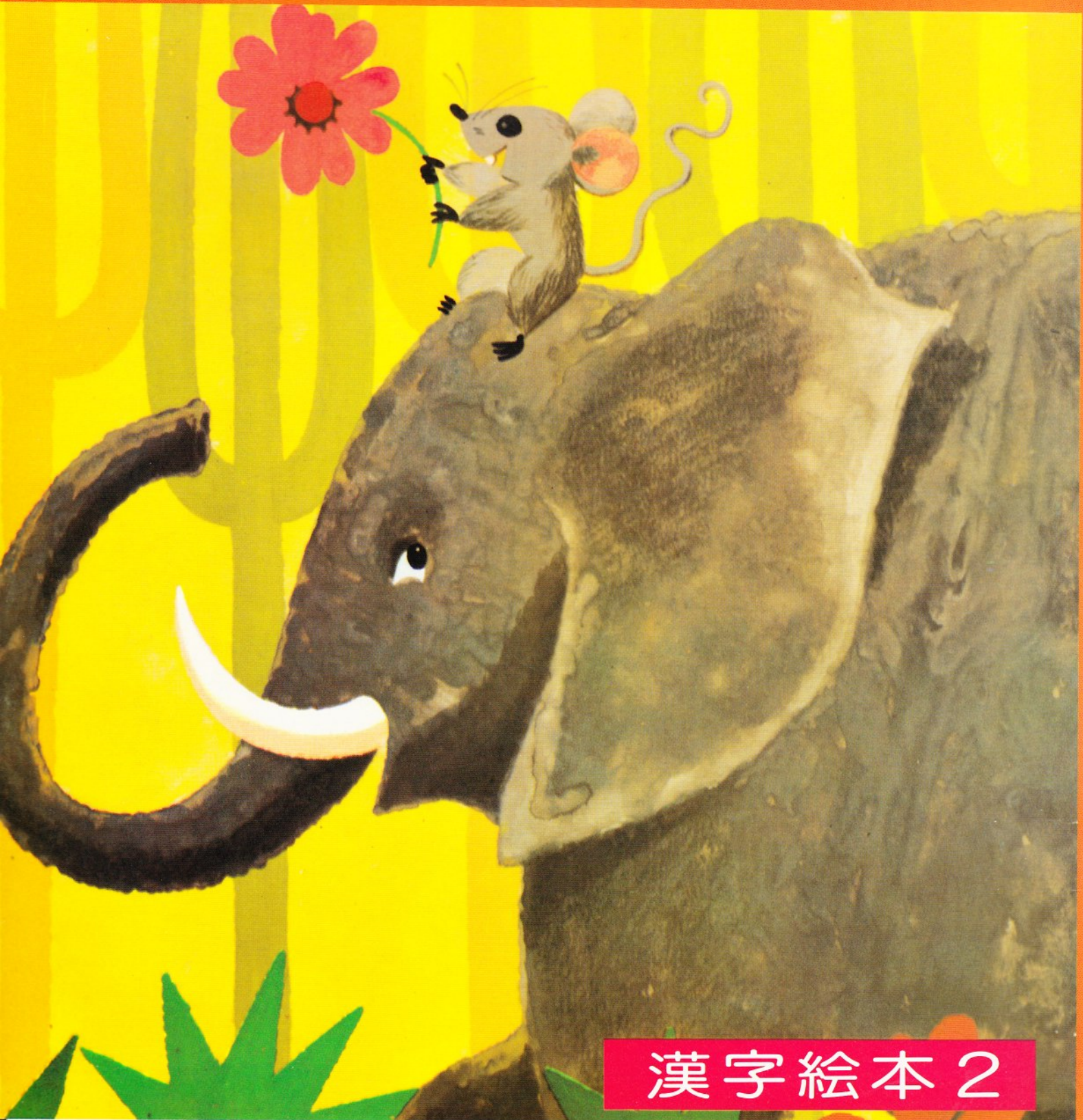


強君と弱君

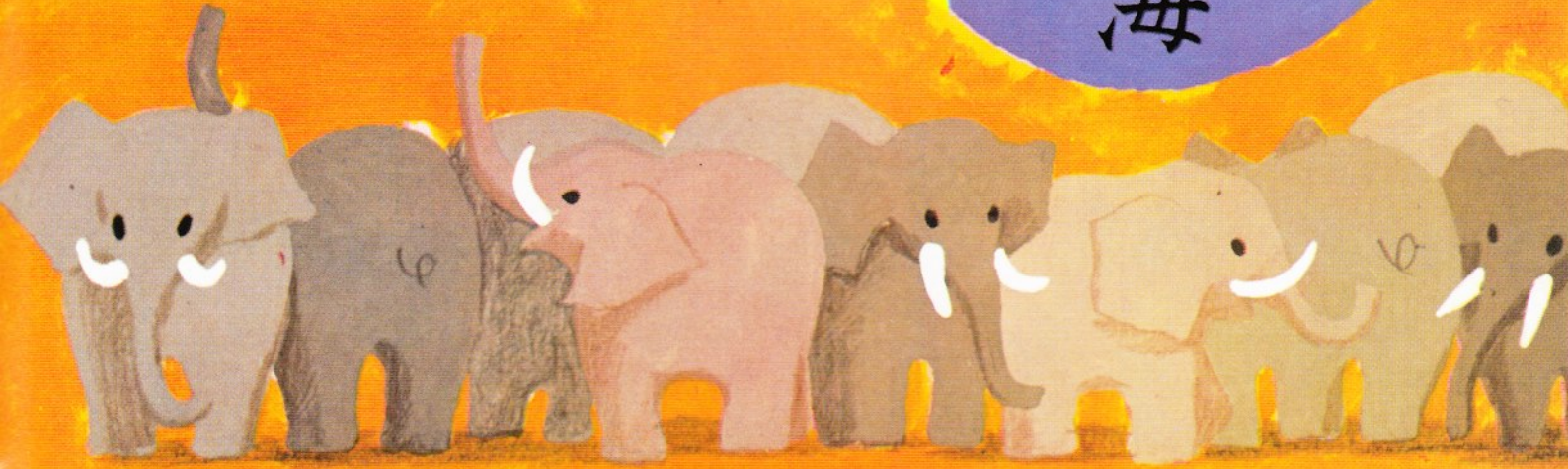
石井勲編



漢字絵本2

空

海



木

象

強君



象の島に

強君という 象が

いました。

力比べをしても

駆けっこをしても

いつも 強君は

一番でした。



強君（つよくん）と弱君（よわくん）の物語りは、自信のない子には自信を持たせ、自信のある子にはそれを過信にまでエスカレートさせないことが、入園期の幼児にとってまず何よりも大切なことだ、と思いましたが、ここに採り上げました。しかし、初めから教訓的に取り上げることなく、毎日ただ読んで聞かせるだけにして、すっかり物語りを覚えてしまった後に、問答法により子供たちの頭でこの物語りのねらいとするものを考えさせる

強君は、もつと

強い相手が

ほしくて、よその

島へ 行こうと

思いました。

それで 広い海に

泳ぎ出しました。



ようにしてほしいと思います。教訓として一方的に教え込むよりも、子供なりに考えさせることが大切です。

漢字も、これを教え込もうと考えずに、『自然と覚えるのに任せる』という態度がよいのです。子供たちは絵本を見ている間に、自然と漢字が目に入り、字形の認識ができていきます。それが進んでどの程度になったか確かめる意味で、漢字カードにして提示して読ませてみるのは良いことです。

島

海

象

魚



鳥

花

貝

広い海を

泳ぐのは 大変

でした。でも、

強君は、がんばり

ました。

魚たちも、

驚いて、強君の

泳ぐのを



幼児には、夢も現実も空想も、大人のようなはつきりとした区別がありません。すべてが言わば同じ現実だと言えましょう。

そのような広い世界で、幼児は休みなく頭を働かせ、それで頭の働きを発達させているのです。幼児期には、思いつきり空想にふけり夢みることが良いのです。そうでないと、

見ていました。

海の真ん中に、

鼠の島が

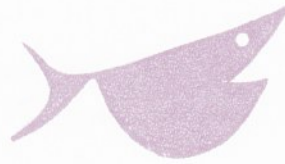
あつて、

弱君という、何を

してもいつも

びりの鼠が

いました。



思考の幅の狭い人間に固まってしまつて、創造性、発展性の乏しい人間になつてしまふ恐れがあります。

夢や空想は非科学的だからいけない、と考へるのは誤りです。科学だつて、夢や空想から生れ、発達したものです。大いに子供の夢を育てて下さい。

鼠



弱君





弱君



ボクシングを

しても、すぐ

負けてしまいます。

荷物運びを

しても、すぐ

伸びてしまいます。

「お前は、よそへ

行って 力を



養つて来い」

王様は、そう

言つて、弱君を

追い出しました。

弱君は、

泣く泣く

旅に出ました。

まだ文字というものを全く知らない二、三歳の幼児に、「鳩・鳥・九・く」という文字を教えますと、意外にも一番先に覚えて読めるようになるのは「鳩」です。今まで一番やさしいと思われていた「かな」は「鳩」の十倍、二十倍の時間をかけて教えても読めるようになりません。





猿



木



鳥



弱君



「鼠君、

どうしたの」

猿が 親切に

声を掛けますと、

弱君は 驚いて

逃げ出す

始末です。

弱君は、

大きな 柱の



幼児は、二、三歳になればどんなに能力の低い子供でも、具体的な内容をもつ「鳩・鶴」というような漢字は容易に覚えることができます。鳩や鶴が理解できて初めて「鳥」が理解できるのです。その次が「九」であり、「かな」は最後になります。

所まで 逃げて
行って、一休み
しました。

それは 象の

強君の足でした。

強君が 起きた

拍子に 弱君は

はね飛ばされて

しまいました。



『具象的なものから抽象的なものへ』これが幼児の理解力を育て進めていく順序なのです。明治以後の文字教育の順序は全く逆だったのです。この本は『幼児の最も覚えやすく読みやすい漢字から教える』という新発見の事実に従って編集されたものです。

象(強君)

鼠(弱君)





蟹



人手



強君と弱君と

勝負を

することに

なりました。

初めは、

隠れんぼです。

強君は すぐ

見付けられ

ましたが、

弱君は 見付け



明治以来の漢字学習は「読み書き同時教育」ですが、石井方式では「読み書き分離教育」であり、「読み方先習」を唱えています。そもそも「九、十」など書きやすい簡単な字形の漢字ほど読み方が覚えにくく、「鳩、針」など書きにくい複雑な漢字ほど読み方は覚えやすいものです。だから「鳩↓鳥↓九↓く」という順序にまず読み方を習わせ、そのあとで書き方をその逆の順序に習わせるのが合理的

られません。

弱君の勝ちです。

次は

綱渡りです。

弱君は、うまく

渡りましたが、

強君は、ずでん

と落ちて

しまいました。



なのです。今までは、初めから読み書きを同時に習わせられたのでむずかしかったのですが、このように読み先習で漢字の字形の認識ができて後に書き方の学習に移れば、容易に書けるようになります。私は、幼児期にできるだけ多くの漢字を読めるようにしておき、小学校でこれらを書けるようにするのが、子供の学習負担を軽くさせて良い、というように考えています。

強君



花

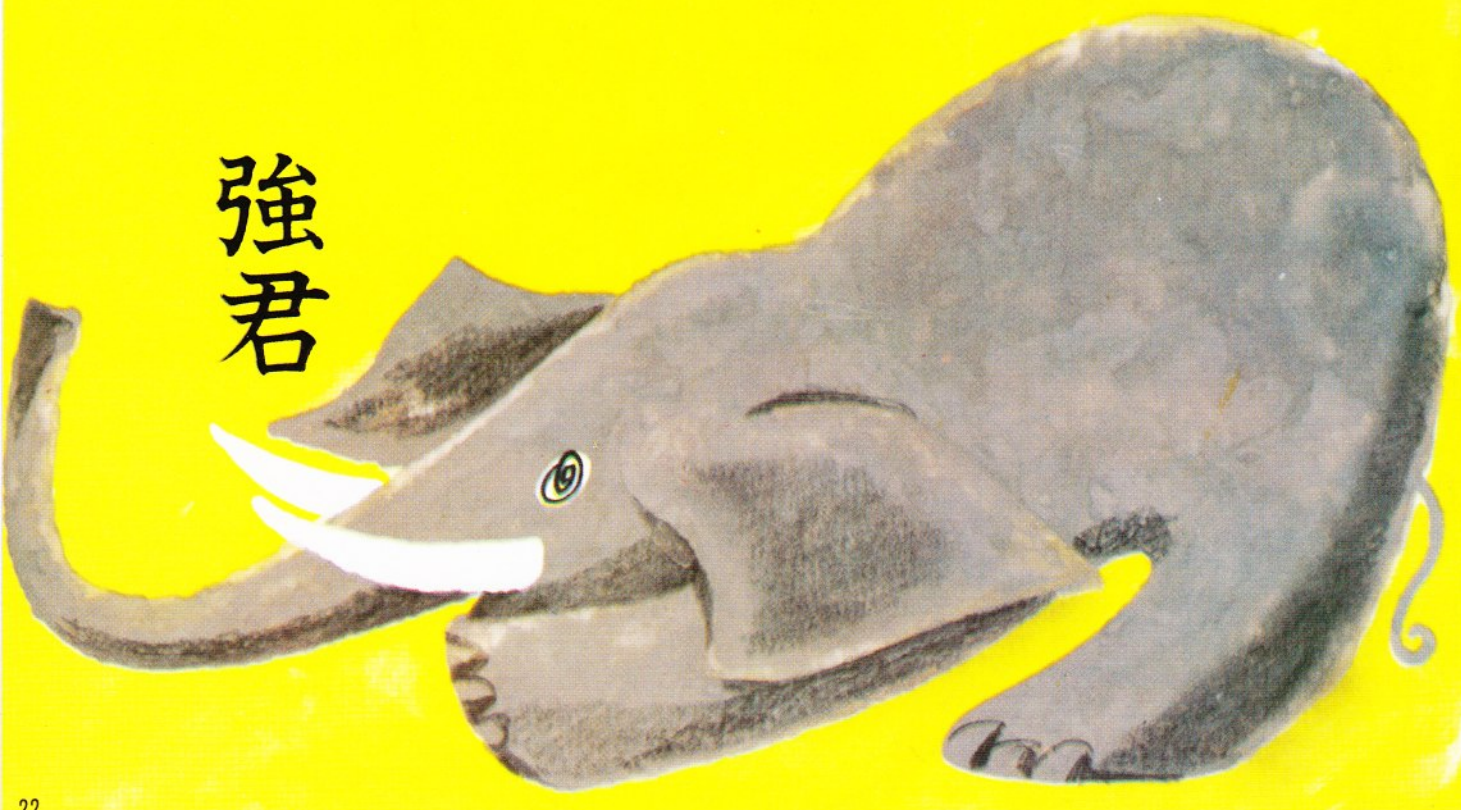
弱君



弱君



強君



こうして

弱君は、自信が

つき、勇気が

出て来ました。

また、強君は

何でも一番だと

思っていた

自分の間違いを

知りました。



弱君は、強君の

頭に乗る、

国に帰りました。

強くなった

弱君を、仲間は

喜んで迎えました。

強君も 優しい、

思いやりの深い

象になり、国に

帰って、りっぱな

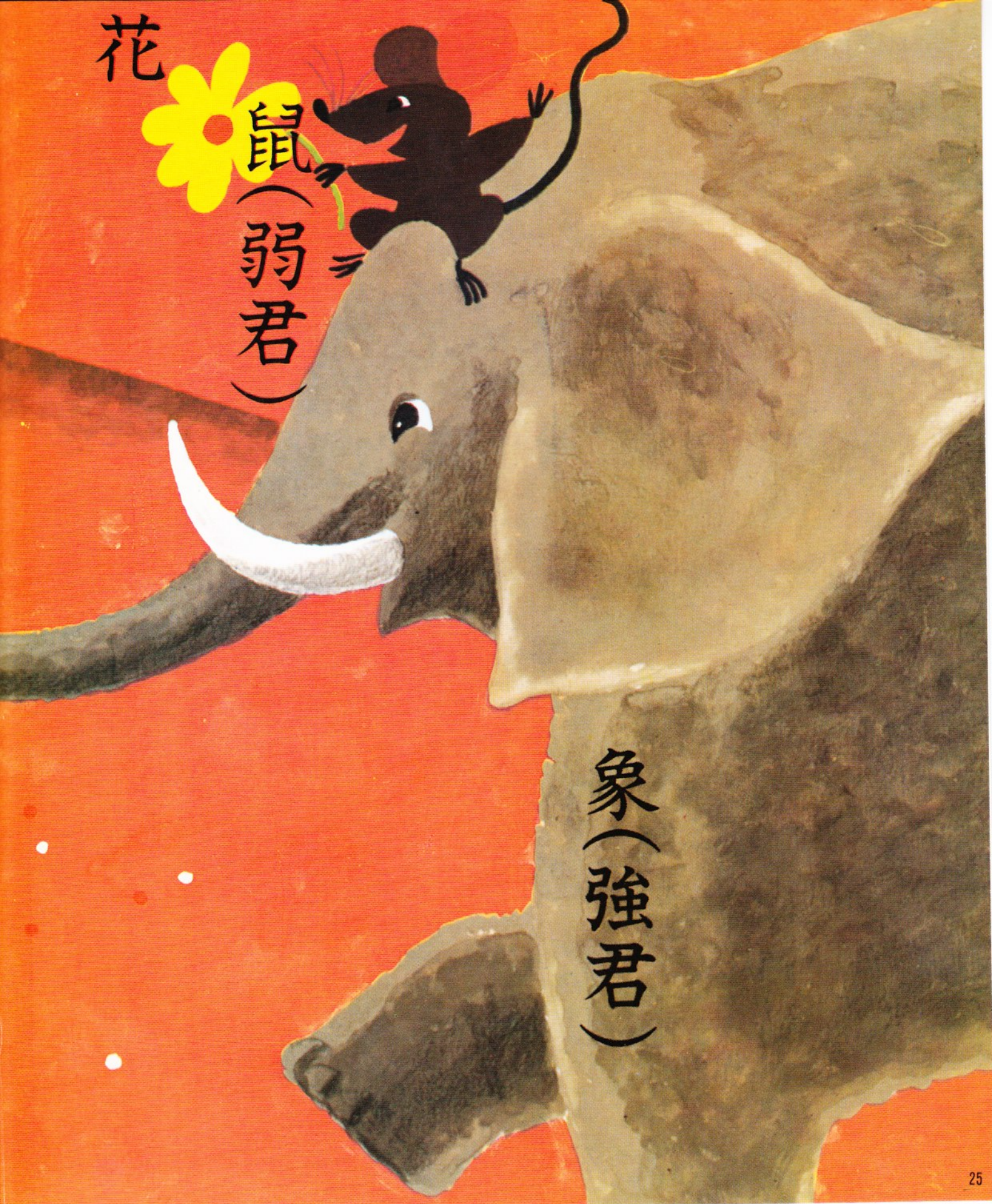
王様になりました。



花



鼠
(弱君)



象
(強君)

木


山

旗

花

鼠





この絵本は、幼児に読んで聞かせるための絵本です。漢字が多いので読みやすく、幼児の表情を伺いながら読むことができます。だから、この本を使いますと、幼児は本を読んでもらうことの楽しみを知り、繰返して読んでくれるよう求めます。こうして、幼児はすっかり文を覚えてしまい、本を読むまねを始めます。そうなれば、自然と文字も読めるようになります。でも、文字を教え込もうと思っははいけません。子供が自然に読めるようになるのを待つことです。

石井勲の漢字教室 別巻 4
本好きになる漢字絵本 2

発行 双柿舎
東京都中央区銀座4-14-11
電話 03(545)2250(代表)